刀根山病院を訪ねて

―設立当時を振り返る―

日本女子体育大学　スポーツ健康学科
教授　青木 純一

新大阪駅からJR，阪急宝塚本線と乗り継いで約30分，最寄り駅の蛍池が近づくと右手前方の小高い丘の上に刀根山病院の大きな建物が目に入る（写真１）。この病院が日本初の公立結核療養所として開所したのは今からおよそ100年も前のことである。そこで大阪市立刀根山療養所と呼ばれた当時の様子を振り返ってみた。

＊

刀根山療養所が開所したのは大正６（1917）年９月のことである。ご存知のように，かつて結核は不治の病といわれ，特効薬のない時代は空気のよいところで静臥し，十分な栄養をとることで病状が改善することもあった。患者が療養する専門施設にサナトリウム（療養所）があるが，大正初期までは兵庫県の須磨地方や神奈川県の湘南地方にわずかに点在するのみであった。その詳細は本誌337号や339号ですでに報告済みであるが，庶民が気軽に利用できる施設ではない。

結核の惨状が深刻化する中で公立療養所の創設を求める声がしだいに高まりをみせる。明治41（1908）年には明治医会が「国立療養所」の設立を内務省に建議し，明治44（1911）年には北島多一による「結核療養所の必要」と題する国家医学会の講演も行われた。さらに明治45（1912）年には帝国議会に結核療養所など予防施設の拡充を政府に糺す質問書が提出されるなど，公立療養所の建設は待ったなしの課題であった。

大正３（1914）年になってようやく「肺結核療養所設置及国庫補助ニ関スル件」が公布される。この法律は人口30万人以上の都市に結核療養所の設置を義務付ける内容だが，設置命令から２年で開所に至る計画で，６年後には東京，大阪，京都，名古屋，横浜，神戸のすべてに公立療養所を完成させる予定であった。ところが，どの都市も候補地の選定が始まると厳しい反対運動が待ち受けていたのである。

＊

大阪市は大阪医科大学教授佐多愛彦や關一助役を中心に７名からなる選定委員会を組織し，府下豊能郡麻田村から桜井村大字南刀根山にいたる丘陵地を候補地として決定する。早々に土地約４万坪を買収する予定で地主と本契約を結ぶ直前，浅田村，豊中村，櫻井谷村３村民による反対運動が起こる。ここではその詳細を省略するが，たとえば，広島市のように設置命令から完成まで14年の歳月をかけた自治体がある一方で，大阪市は公立療養所の中では最も早く，ほぼ既定の２年で完成させた。ここには佐多や關を中心とする関係者の並々ならぬ努力があるが，その姿勢は完成した療養所の目的や設備にも表れている。

刀根山療養所の大きな特長に学術研究がある。療養所規則第一条には「大阪市立刀根山療養所ハ肺結核患者ヲ収容診療シ結核ニ関スル学術的研究ヲナス所トス」とあるが，研究を目的とする公立療養所は刀根山のほかにはない。初代所長有馬頼吉は，「佐多先生は最初の位置の選定から，諸般の設備事項まで殆どお一人で切り回された」と述べ，「病室には（中略）暖房がなくてはならぬこと，研究室を必ず附設すること，所長は技術者で一切の長たること」など細かい指示があったと振り返る。また，あるとき研究上の必要から大阪市に動物小屋の予算申請を願い出ると，渋る市長を關一助役が説き伏せてくれたと回想する。当時結核研究の第一人者佐多愛彦はもちろんのこと，のちに大阪市長となる關一をはじめとする関係者の熱い思いが刀根山の診療や研究を幅広く支えていたことがわかる。

＊

大正６（1917）年９月１日，療養所の落成式が行われた。新設したばかりの療養所を新聞は次のように伝えている。

大都市の煤煙を厭ふ人々が求める恰好の地である大阪市立刀根山肺結核療養所は此処に建設せ

写真１　阪急宝塚本線蛍池駅に程近い丘の上の刀根山病院（現在の全景）

写真２　大正６年開設当時の全景を表したジオラマ

られ九月一日落成の式をあげ市の公人私人を招待した。蛍ヶ池停留所に下りると，刀根山の小丘を中断して新しい道路がつけられてある。一丁餘行くと白木の匂ひゆかしき新療養所の正門につく，清洒な竹林と小松とに囲繞せられて澤山の棟々が三萬五千餘坪の盆地を狭いばかりに建てられている（『大阪朝日』1917年９月２日，朝刊）（写真２）

入院患者の一日の生活をみると，起床が朝５時，６時に診察，７時朝食，12時が昼食である。さらに夕食前の４時に診察，５時が夕食で９時に就寝する。重症者はこの間ひたすら静臥するだけだが（写真３），軽症者となると，ときに院内を散歩し，刀根山の小高い丘の上に設けられた天井硝子張りの日光浴室で仰臥椅子に横たわり，当時は効果があるとされた太陽の光を燦々と浴びることもできた（写真４-１，２）。また，娯楽室を使って囲碁，将棋，蓄音器などに興じることもある。献立をみると１人１日25銭の賄であった。ある日は，朝が味噌汁・浮葱，昼が南京に薩摩芋，夜が赤豆・薄揚と菜食中心の決して贅沢な食事ではないが，療養の途なき患者にとってそれは重要な栄養源であったと思われる。

＊

刀根山病院が刊行した「記念誌」や「年報」（写真５）から当時の入院患者の実態をまとめてみた。ここに挙げた表は患者の転帰である。これをみると半数以上が入院中に死亡している。また，治癒する前に退院する患者も相当数いた。さらに入院患者は圧倒的に男性が多い。こうした特徴は大阪と同じ大都市に付設した東京市療養所にも共通する。

表　入院患者の転帰（大正６年～昭和４年）　単位（人）

	入　院	退　院		計	死　亡	継　続（昭和４年末）
		治　癒	任　意			
男	4,437	655	991	1,646	2,493	299
女	1,733	330	350	680	967	85
計	6,170	985	1,341	2,326	3,460	384

注）・「任意」とは「治癒」以外の理由で退院したものを指す。
・出典は『大阪市立刀根山病院二十年史』，63-64頁。

患者の平均年齢は男28歳，女24歳と若く，16歳～30歳までの青年層が全体の約66％を占めていた。まさに結核が亡国病といわれた所以であろう。

開所当初は意外にも入院希望者が少ない。結核や療養所に対する人々の無理解や偏見がこの背景にあったと思われる。ちなみに開所１年を経た刀根山の患者数は定員350人に対してわずか107人であった。ところが，その後は年を追って入院希望者が増加し，大正11年になると初めて満床で待機者が出る。入院希望者の増加が大きな理由だが，患者の入院日数が長期化したことも一因である。開所時の平均入院日数が41日，ところが「刀根山病院」と名を変える昭和４（1929）年には196日と約４倍増である。この年に待機者が100人の大台を超えるとその後は増加の一途で，たとえば，昭和７年が270人，昭和11年が480

写真３　大正時代と思われる重症者が静臥していた病室

人であった。そのために入院前に死亡する患者も多い。昭和４年に入所申請を取り消した患者299人の理由を調べると，「死亡」141人，「重篤で療養所への搬送不能」24人である。

刀根山療養所は満床状態を改善するためにたびたび施設拡張を行った。その結果，昭和２年が定員420人，鉄筋コンクリート造５階建の新棟を建設した昭和９年が750人（写真６），さらに昭和14年には1250人と大幅に定員を増やしている。この間，昭和９年からは有料患者（当時一日50銭）の受入れを開始し，昭和12年には快復者のための保養所も併設した。

＊

「医学は結核病に就て知る所最も多く，得たる所少し」，これは結核の医学的解明が進む中，なお肝心の治療法が見つからなかった当時の関係者の言葉である。しかし，刀根山病院の歴史を振り返ると，こうした言葉を糧としながら臨床や研究に邁進する伝統が息づいていた。むろんその根底には我が国初の公立療養所としての誇りと責任があると，この度の訪問を通して強く感じた次第である。

写真４-１　丘の上に設けられた日光浴室

写真４-２　丘の上に設けられた日光浴室

写真５　「大阪市立刀根山療養所年報」

写真６　昭和12年に刊行された「大阪市立刀根山病院二十年史」の表紙。昭和９年に建設された鉄筋コンクリート５階建の新棟

刀根山病院を訪ねて

結核予防会
顧問　島尾　忠男

創立当初から組織として市立結核研究部門を併設

大正６（1917）年に公立の結核療養所として全国で最初に建設された大阪市立刀根山病院は，設立当初から市立の結核研究施設を併設するという特色を持った施設であった。病院規則の第１条に「大阪市立刀根山療養所は肺結核患者を収容診察し，結核に関する学術的研究をなす所とす」と明示されており，このようなことが可能であった背景には，当時の関大阪市長，大阪医科大学（後の阪大）佐多愛彦教授の理解と協力があったからである。開設の翌年大正７年７月に研究室は火災で焼失したが，直ちに再建されている。病院の有馬初代院長（写真７）は戦前によく使われたAO（アーオー）などの結核治療薬を生み出している。

病院は戦時中に日本医療団に統合され，敗戦後の昭和22(1947)年に今度は国立療養所に移管されたが，病院の経営主体が変わる中でも，日本医療団，続いて厚生省と契約を交わした上で，大阪市立の結核研究施設は同じ敷地内に保持され，医師は病院での診療と研究施設での研究の双方に従事してきた。このような特異な形が許された背景には，病院の土地は大阪市が保有し，地権者として病院を経営する主体と交渉できたことがあるが，それにしても大阪市当局の研究活動に対する理解と協力なしにはこのような形はありえなかったと思われる。

目覚ましい成果の一つが山村雄一先生の実験空洞の作成に関する研究

医学の研究，ことに感染症を対象とする研究では，病変を形態学的な立場から見る病理学，病気を起こす病原体を中心に研究する細菌学，そして病原菌とその成分とそれに対する人体側の反応という立場から観察する生化学，免疫学的な研究の領域がある。同じ公立結核療養所の２番目として建設された東京市の中野療養所でも，研究活動は活発に行われたが，その中心は岡治道先生に主導された病理学的な研究であり，その伝統は結核予防会の設立と共に，結核研究所に引き継がれた。

昭和20年代の大阪大学には，理学部に赤堀四郎先生という高名な化学研究者がおられた。医学部卒業生で赤堀教室に学び，その成果を結核研究に応用したのが山村雄一先生（写真８）である。ヒトの結核を研究するモデルとして，動物を用いる実験が良く行われるが，マウスやモルモットに結核菌を注射すると，「結核」という病名の基になった結節性の病変はできるが，ヒトの結核病変のもう一つの特色である乾酪変性，そしてその融解排除の結果発生する空洞は動物ではなかなか作れなかった。増殖した結核菌がその壁に無数に見られる空洞こそが，ヒトの結核の体内の転移源であり，周囲への感染源でもある。刀根山病院の医長であり，大阪市立大学付属刀根山結核研究所の助教授も兼ねておられた山村雄一先生とその部下のグループがこの難問に挑戦した。

写真７　有馬頼吉初代院長

写真８　山村雄一先生

赤堀教室で学んだ結核菌の菌体成分分析とその生物活性を観察する手法を活かして，苦心して実験を重ねた末に，事前にウサギに結核菌の菌体成分を注射して，遅延型過敏症，例えばツベルクリン反応が強く出るような状態にしておいて，その肺内に結核菌を注入すると確実に空洞ができることを証明した。その後の研究で，遅延型過敏症が強く成立している状態であれば，生きた菌ではない結核菌の菌体成分を注入しても空洞ができることが示された。これら一連の研究は1954年から56年にかけて次々と発表され，刀根山病院の，そして併設されている大阪市立大学刀根山結核研究所の名が天下に知られることになった。

山村先生はこれら一連の業績が評価されて1957年には九州大学医学部の生化学教室の教授に就任，1962年には母校大阪大學医学部の内科学教授に迎えられ，活動範囲を免疫全般に拡大し，新たな内科学を興し，1967年には大阪大學医学部長，1979年から1985年までは阪大総長を務められた日本屈指の医学研究者であり，その育った基盤が刀根山病院であり，その所管が変わる中でも研究への関与を忘れなかった大阪市当局の英断があったことを特記しておきたい。

1980年代に始まったHIVの流行は，結核の蔓延状況にも深刻な影響を与えたが，HIV感染者，ことにエイズ患者に併発する肺結核では空洞形成が少なく，痰の塗抹陽性の肺結核が少なくなることが分かってきて，エイズの流行のお陰で山村学説が人においても正しいことが証明された。このことを，WHOの理事会で確認し，帰国後先生に報告した際の，山村先生の笑顔が強く印象に残っている。

刀根山病院の歴代院長には，堀三津夫先生，螺良英郎先生，小倉剛先生など，当会大阪府支部長をしていただいた方も多い。

最後になるが，今回の取材に際しては，刀根山病院の佐古田三郎院長，前倉亮治副院長，中本達夫管理課長，山盛武彦庶務班長，及び第12代院長で前結核予防会大阪支部長の小倉剛先生，山村雄一先生のご令弟の山村好弘先生のご協力を得，誠意と熱意溢れるお話を伺うことができた。この紙面を借りて改めて深謝申し上げたい。

写真 9　取材にご協力いただいた方々。左から青木純一先生，佐古田院長，筆者，山村好弘先生，小倉剛先生，前倉副院長，中本管理課長，山盛庶務班長